

信心は「めざめ」か「おまかせ」か

2014.6.4 甘露の会 於ビューポートくれ 岩崎智寧

■はじめに—信心の説明・表現—

まかす…「まかせよ必ず救う」（本派布教の常套句）…三業惑乱以後（信樂）
…それ以前は蓮如「たのむ・たすけたまへ」

親鸞の用例

「まかす」○

ただ願力にまかせて（『末燈鈔』『真聖全』2-685『註釈版』743）

ただ如来にまかせまいらせおはしますべく候

（『末燈鈔』9『真聖全』2-669『註釈版』781）

ただ如来の誓願にまかせまゐらせたまふべく候ふ。

（『末燈鈔』10『真聖全』2-670『註釈版』782）

ただ仏にまかせまいらせたまへ

（善性本『御消息集』2-714『註釈版』798）

…「はからひがない・はからはない」とセット・対義語として

古語として①ゆだねる。任せる。②従う。（学研『古語辞典』）

現代語として①自分のすべきことを他の人に代行してもらう。頼んでその人のしたい通りにやらせる。ゆだねる。②なすまにさせる。（「まかせる」学研『国語大辞典』）

「たのむ」○「たすけたまへ」×

ただ如来の至心信樂をふかくたのむべし

（『尊号真像銘文』『真聖全』2-578『註釈版』644）

本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを「唯信」といふ。

（『唯信鈔文意』『真聖全』2-639『註釈版』699）

現代語の「たのむ」は、他に対して願うという意味が主であるが、古語の「信賴する」「たよる」「まかせる」という意味が主であり、『御文章』はその意味で用いられる。希（祈）願請求×許諾○

（『安心論題綱要』P49勸学寮）

めざめ体験…信樂峻鷹

親鸞の用例…めざめるという表現はみられない

…仏教の原理的・本質的側面からの理解・発信

能入位の信（二元的・对象的）

→能度位の信 citta-prasāda 心澄淨（一元的・經驗的）

= 出世的な智慧・三昧・見仏と重層…めざめる

信心清淨なれば、華開けてすなはち仏を見たてまつる。

（龍樹『十住毘婆沙論』『七祖篇註釈版』17）

→「信心歓喜」「信樂」（『無量寿経』）

→「信心の智慧」

左訓「信ずるころのいでくるは智慧の起こるとしるべし」

（親鸞『正像末法和讃』『真聖典』2-485『註釈版』606）

…選択本願を見る・仏を見る・如来を拜見・仏恩を知る

= 究極的真実なるものとの値遇体験（『真宗学概論』191）

■視点

信樂先生…体制（社会・教団）内教学をどう超えるか（←戦争体験）

…仏教としての浄土真宗の真実性を現代社会に弁証する

私…カウンセリングに学んで見えてきたこと

■①「おまかせ」の内実…そのまの救い

『観無量寿経』下々品「転教口称」の解説

一切の衆生を平等に救う絶対的な本願力の前には、凡夫の心の善し悪し

は、役にも立たなければ邪魔にもなりません。ですから本願の念仏は、

わが心の善し悪しに目をつけず、「お願いだから念仏して浄土に生まれ

ておくれ」とおおせられる本願のみことばをはからいなく受け入れて、

本願力に身をまかせ、ただみ名のみを称えればいいのです。ありがたく

思った心でもたすかるのでもなく、まして称えている口のはたらきで救わ

れるのでもありません。ただ南無阿弥陀仏が救いたまうのです。だから

心に仏の徳を思い取ることができなければ、できないまま、ただ口に南

無阿弥陀仏ともうせば、南無阿弥陀仏の力で往生せしめられると教え

わけです。（聖典セミナー『観無量寿経』本願寺）

【参考】

『観経』下々品

五逆・十悪の愚人、命終らんとする時に臨みて、善知識の、種々に安慰して、

【MEMO】

■まかす

□親鸞に おける「まかす」の用例
 往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにても候はず。めでたき智者もはからふべきことにも候はず。大小の聖人だにも、ともかくもはからはで、ただ願力にまかせてこそおはしますことにて候へ。
 (『註釈版』742-743)

往生の業には、わたくしのはからひはあるまじく候ふなり。あなかしこ、あなかしこ。ただ如来にまかせまゐらせおはしますべく候ふ。あなかしこ、あなかしこ。(『註釈版』781)

仏智不思議と信ぜさせたまひ候ひなば、別にわづらはしく、とかくの御はからひあるべからず候ふ。ただひとびとのとかく申し候はんことをば、御不審あるべからず候ふ。ただ如来の誓願にまかせまゐらせたまふべく候ふ。とかくの御はからひあるべからず候ふなり。あなかしこ、あなかしこ。(『註釈版』782)

補処の弥勒におなじ位に信心の人はなせたまふゆゑに、撰取不捨とは定められて候へ。このゆゑに、他力と申すは行者のはからひのちりばかりもいらぬなり。かるがゆゑに義なきを義とすと申すなり。このほかにまた申すべきことなし。ただ仏にまかせまゐらせたまへと、大師聖人(法然)のみことにて候へ。

(『註釈版』798)

■「めざめ」の用例

見あたらぬ

□信楽峻磨

【Ⅱ】真宗の信心 (『真宗の大意』)
 第五章 めざめ体験を信心という (『現代真宗入門』)

□仏教における信

citta-prasāda 心澄淨 「信楽」「信心歓喜」の原語
 prasāda ①澄淨②喜悦

□浄土真宗における
 知的な営みとして
 智慧の信心

awakening として まったく主体的にその意識のもっとも深層のところを経験的に「知られてくる」「分かってくる」ことをいうのです(同書 101)
 日本語では「腑に落ちる」「思いあたる」

becoming
 目ざめ体験において変革されて

知ることは成ること＝しるし「徴」

深心 = deepmind 深いめざめ体験

たのむ・たすけたまへ

※たのむ…○
 たすけたまへ…×

□たのむ

如来より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて臨終の称念をまつべからず、ただ如来の至心信楽をふかくたのむべしとなり。
 (『尊号真像銘文』広本『註釈版』644)

□たのま

弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて、迎へんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とは申すぞととききて候ふ。
 (『親鸞聖人御消息』『註釈版』699)

□たのみ

本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを「唯信」といふ。

それにつけても念仏をふかくたのみて、世のいのりにこころにいれて、申しあはせたまふべしとぞおぼえ候ふ。(『唯信鈔文意』 699)

□たすけたまへ 用例にはない

われらがこころのよきをばよしとおもひ、悪しきことをば悪しとおもひて、願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることを、仰せの候ひしなり。(『歎異抄』『註釈版』 834)